

令和2年12月の解説（週間天気予報）

【12月の天候状況】

上旬は、低気圧が数日の周期で日本付近を通過し、その後は北日本を中心に冬型の気圧配置となる日が多くなりました。このため、北日本・東日本日本海側では曇りや雪または雨の日が多くなりました。一方、太平洋側では晴れた日が多くなりましたが、北日本・東日本太平洋側では気圧の谷の影響で雲の広がりやすい日がありました。旬を通して低気圧の影響を受けにくかったため、北日本と西日本では降水量がかなり少なく、北日本太平洋側と西日本日本海側、西日本太平洋側では、平年比がそれぞれ15%、13%、2%となり、1961年の統計開始以降で最も少なくなりました。一方、沖縄・奄美は、前線や湿った空気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が続いたため、日照時間は平年比7%となり、1961年の統計開始以降で最も少なくなりました。また、8日から9日にかけては前線の活動が活発となり大雨となった所があったため、降水量はかなり多くなりました。

中旬は、13日頃までは冬型の気圧配置が弱かったものの、その後は断続的に強い寒気が流れ込んだため、日本海側では雪の日が続きました。15日から16日にかけては東日本日本海側を中心に大雪となり、群馬県藤原や新潟県湯沢では24時間降雪量が1mを超えるなど、記録的な大雪となった所がありました。この大雪のため、関越自動車道では多数の車両が立ち往生するなど、大規模な交通障害が発生しました。また、農業用ハウスが倒壊するなどの農業施設被害も発生しました。一方、太平洋側では晴れた日が多く、低気圧の影響を受けにくかったため降水量は少なくなりました。沖縄・奄美は寒気の影響で曇りや雨の日が多くなりました。

下旬は、23日までは冬型の気圧配置となる日が少なく、高気圧に緩やかに覆われたため太平洋側では晴れの日が多く、日本海側でも晴れ間の出た日がありました。24日は日本付近を低気圧や前線が通過したため、曇りや雨または雪の降った所が多く、荒れた天気となった所もありました。25日から26日は冬型の気圧配置となり、日本海側では雪や雨の降った所が多く、太平洋側は晴れた所が多くなりました。27日から29日は日本付近を低気圧が通過したため、太平洋側でも雨の降った所が多くなりました。30日から31日にかけては、冬型の気圧配置が強まり日本海側では大雪となり、31日時点での積雪は平年を上回った地点が多くなりました。沖縄・奄美では湿った空気や寒気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多くなりました。

【12月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3~7日目平均)は、例年値^(注)よりも6ポイント高い81%でした。地方別の適中率では、沖縄地方と北陸地方を除く各地方で例年値を上回りました。

最高気温の予報誤差(2~7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.3℃小さい1.8℃で、すべての地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差(2~7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.2℃小さい1.8℃で、東北地方と九州南部地方を除く各地方で例年値よりも小さくなりました。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【2月の週間天気予報の利用にあたって】

2月は、1月とともに1年で最も気温の低い時期で、厳しい寒さとなる日が多いです。一方で、低気圧が発達しながら通過すると気温が急上昇した後、急下降するなど、気温の変動が大きくなる時期でもあります。気温の変化は地域によっても異なりますので、厳しい寒さへの対策とともに、週間天気予報で気温変化の傾向をつかみ、急激な気温変化に備えて健康管理などにも活用して下さい。